

静岡県現地支援調整本部派遣者（第6次隊員）

所 属 水道サービス課
職氏名 主事 宮澤 宏枝

私は今回、大槌町で避難所での総合受付と物資拠点での活動、町役場での仮設住宅入居とがれき撤去の受付を行いました。

現地は2ヶ月たった今でも、状況・情報がまだまだ混乱しており、被災者の方々は行政の指導力と支援を切実に必要としている状態で、非常時の行政がいかに重要かを身にしみて感じました。それは役場が残っている山田町と、役場が全壊し町長と職員の4分の1が流されてしまった大槌町の復興状況を比較してみると顕かです。

また国・県・市町村・避難所のどんな組織であろうと、そのトップに指導力があるかないかが大きく組織の質に関わってくると感じました。大槌町で現在一番大きな避難所の城山体育館は十年前に、「この場所は津波の時に必ず避難所になる」と、住民の猛反対にあいながらも、それに屈せず大型の発電機を入れた議員さんがいたそうです。その為、3月11日の震災当日から体育館の明かりがついたと聞きました。決断力と信念があった方だと、今では評価されているそうです。何をすべきかを心得ている方がトップにいることが重要だと思いました。

それ以外には、自身も被災者であり、避難所から仮役場に通っているような方もいる町職員が、町民のために不眠不休で働きながらも、人を思いやる心を忘れない姿勢に、自分の公務員としてのあるべき姿を学ばされ、本当に頭が下がる思いでお手伝いをさせていただきました。

印象に残っていることは、釜石市在住で家が全壊しながらも、親子でボランティアに参加している方からの話です。釜石市ではもともと、昔からの住人と、新日本製鐵(株)の従業員とその家族とで新興住宅に住む方たちとの間に、目に見えない距離があったそうです。今回の震災により、主に昔からの方々の家が流され、新興住宅の方々の家は残ったケースが多いそうです。しかしながら家が残ったとしてもライフラインは断たれ、物資もないため、避難所に食料を貰いに行くと、冷たい目を感じるため、外に出ることが怖くなり、家に籠り切りになっている人がいるそうです。市の外観は復興したとしても、そうした根深い傷が残ってしまうことを少しでもなくすために、その親子はボランティアに参加されたそうです。外側の復興ばかりに目が向けられがちですが、そうした目に見えない傷をなくすことが、これからの復興の一番重要なことではないかと思いました。

経験して良かったことは、第一に県の方、他市町村の方、また多様な課に所属する方たちと寝食をともにし、しっかりと話ができたことです。様々な立場からの見方を教えていただくことができました。

また実際に被災地を見、町役場に入らせていただいたことにより、東海地震が必ず起こるといわれている静岡県、また最大の津波が来ると予想される地域を抱える沼津市に何が必要なのかを考えさせられました。特に現地の道路上でよく見かけた「津波到達想定区域」の看板ですが、今回の震災ではその区域をはるかに越えて津波が来ている様を目の当たり

にしました。想定以上の対策が必要なのだということを思い知らされました。

大槌町役場の方に聞くと、震災直後1ヶ月ほどは何をしてよいのかまったくわからず、動けなかったとのこと。町長がいなくなってしまったため、統制がとれなかったことと、対策本部を立てたところが避難所になってしまい、混乱を来たしたそうです。そうした一事にも、これから自分たちに何が必要なかの示唆があると思いました。

その他に、今回、大槌町の町役場でがれき撤去の受付をさせていただきましたが、山田町ではそういった申請は取らず、町役場の判断で撤去をしているそうです。作業のための私有地への立ち入り、倒壊、また津波で流された家屋の撤去は所有者の承諾を得なくてもよいとする、政府が出したがれき撤去に関する内容はあくまで指針であり、法的根拠に乏しいものです。そう考えると、確かに山田町でのがれきの撤去は格段に早いのですが、法的根拠を必要とする行政の仕事としてどちらの町が正しいのか、よく考える必要があると思いました。そういったことを洗い出し、有事が起きたときにすぐに対応できるよう、前もって対応策を決めておくことも大事だと思いました。

今、被災地では「アンパンマンのマーチ」と DRAMS COME TRUE の「何度でも」が応援ソングとしてよく聴かれているそうです。私も派遣を終えて聴くと、派遣前とはまったく別の曲に感じるほどで、価値観の変化を感じます。自分の価値観が変わるほどの体験というのは人生でそうあることではありません。改めて、今回の派遣の意義を深く感じさせられました。